12 月 15 日の説教要旨　　「来るべき方」　　山本一牧師

マタイによる福音書11章2～19節

●今日の聖書の箇所で、イエス様は当時の世相を**「笛を吹いても踊らず、悲しみの歌を歌っても悲しまないと嘆く子どものようだ」**と表現しました。この言葉は、人々が「神さまは自分の期待に応えてくれない」と感じ、嘆いている様子を表しています。
また、**ヨハネが禁欲的な生活を送ると「悪霊に取りつかれている」と批判され、イエス様が食べたり飲んだりすると「大食漢で罪人の仲間だ」と批判されている**という言葉は、本質を見抜けず、揚げ足取りな批判ばかりに明け暮れている世相を表しています。このような現実は、昔から今に至るまで変わらない現実かもしれません。
●そのような時代にあって、洗礼者ヨハネもイエス様が本当に来るべきメシアであるのか疑いを持ち、弟子たちを通じてイエス様に質問を投げかけます。
この問いに対し、イエス様は預言者イザヤの言葉を引用して**「目の見えない者が見え、足の不自由な者が歩き、・・・貧しい者に福音が宣べ伝えられている」**と答えられました。イエス様はご自身が世を転覆させるような裁きではなく、深い神の愛と献身をもって変革をもたらすメシアであることをヨハネに思い出させ、さらに、**「私につまずかないものは幸いである」**と述べて、この世にあって神の愛は確かに働き、神の国が広がり始めているのだという希望をヨハネに告げました。厳しい世の中において、ただ神の愛を信じ、希望を持って生きることへの励ましがここにあるのです。
●アドベントキャンドルの 3 本目の蝋燭には「喜び」の意味が込められています。私がアメリカで牧師をしていた時に、認知症の方への介護方法「ユマニチュード」に触れる機会があり、その中で新たな誕生の喜びについて学びました。それは、認知症や心身に衰えを抱えた人々が、愛情や優しい語りかけを通じて自らの尊厳を回復し、その結果として心身が驚くほど回復するという「第3の誕生」と呼ばれるプロセスです。これはイエス様がもたらした神の愛による「変革」に通じています。イエス様は、裁きではなく愛と優しさを持って社会から疎外された人々に寄り添い、触れ、言葉をかけることで、彼らに新たな命と喜びをもたらしたのです。
●今日の世の中も、対立や分断が進み、社会的に疎外されている人々が多く存在します。そのような時代だからこそ、真の「愛の光」が必要です。私たちはアドベントの期間を通じて、イエス様こそが愛の光を体現された「来るべき方」であることを改めて確認し、そのイエス様の愛をどこまでも信じつつ、共に愛の業に励んでいきたい。そう願います。